
黒幕

茶犬

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒幕

【Nコード】

N2104S

【作者名】

茶犬

【あらすじ】

ホラー系サイトを運営している主人公。
ふと怪しげな一枚の写真を見つける。
写真確かめに現地へ行ってみると・・・!!?

part 1 (822文字)

サナの恐怖の部屋。

赤字でおどろおどろしい文字のタイトルが
トップに表示されてる私のページ。

この更新にもだいたい慣れてきた。
テキストに怖そうな建物に入って写メ撮って、アップ。
さも私が怖い思いをしたように書いて、お疲れ様。

最初のころは呪われるんじゃないかと思って
ちょっと怖かったけどそんなことはなかった。
住宅街ということもあってネタ元には困らないし。
更新を重ねていくうちにいつしかデイリーランキング12位。

いわゆる人気ブログなのかな。すごいじゃん、アタシ。

広告料だけで食べていくのも楽ではあるけれどそれなりに大変。
かぶらないように、わからないように、怖くする。

正直、疲れる。
コメントの処理も大変だし。
そんな恐怖体験しないっつの。

携帯を開いて昨日の廃ビルで撮った画像を見る。
冷静にみるとフツの荒れたビル…の画像。

これを幽霊に追っかけまわされて、そして命からがら逃げ出して…

あはは。私、ホントにどんな人だよ。

画像フォルダを目に映しては流していく。

そのまま頭にイメージを作っていく。幽霊とか、状況とか。

どんなのにしようかな。

飛び降り自殺で顔がつぶれた事務職員…懲りすぎだよね。

ストレスで手首を切った人…。

目の前の道路ではねられた老婆。

頭のスイッチをかすめることもなくどのイメージも浮かんでは消えていく。

はあ…ネタ切れかな…。

ん？

指の動きをいったん止めて前の画像に戻る。

真っ黒。

なにこれ。

その前の画像に戻ってみる。廃ビルの画像。
この部分の画像だけ撮れてない。

いつも進みながら撮ってるから

前後の画像を見比べればどの場所で撮ったかはわかる。
撮影ミスならばやけたり、壁の輪郭がうつすら見えたりはするけれど

こんな黒幕を真正面から撮ったような画像ってふつつ作れる？

ウソ。これもしかしてやばいやつ？

うつわぁ。もう一年やってるけど、こっいつの初めてだなぁ。

他の画像をもう一度細かく見てみても変な部分は見当たらない。

最近ネタ切れ気味だし、一回ぐらいホントの体験してみるべきかな
あ

part 2 (929字)

おととい来た時はなにも準備してなかったけど無事だったし、大丈夫だとは思うけど。

一応近くの神社でお祓いもしてきた。

電気がついてない廃ビルは以前よりずっと不気味に感じる。
カーテンの隙間から入ってくる弱いスポットライトが室内のチリをうつす。

携帯の画像を見比べながら私の足取りを私が追っていく。
顔をあげるのちょっと怖いので

携帯を覗き込むようにして二階へあがる。

保存してる写真がじょじょに例の写真へと近づいていく。

携帯から顔をあげて辺りを見渡す。

たぶん、このあたりで撮ったんだと思う。

その場所は廊下の中央で、左右には部屋への入り口がある。

もともとは事務所だったと思う。

中をのぞくと古いソファーがそのままにされている。

黒幕写真がどの方角で撮ったのかわからないので

辺りをぐるりと回りながら撮影。

携帯から出てくるシャッター音がビル全体に広がるような気がする。
すぐに撮った写真を一つ一つ確認していく。

前廊下の奥。

右の部屋。

左の部屋。

天井。

床。

廊下。

ひっ。

うわずった声が出て携帯を取り落とした。
振り返った後ろの廊下の奥の写真に前撮ったような黒幕があった。

人型の。

人の形をした黒い塊は廊下の奥にある壁に張り付くように立っている。

帰ろう！

すぐに。すぐに。

上ってきた階段を乱暴に駆け下りていく。

何段か踏み外しそうになった。

ビルから出ると外はまるで異世界のように明るく、うるさかった。

その夜はそのまますぐ家に帰った。

お風呂に入るのも無理。鏡見るのもムリ。

布団に入ってずっとＴＶをつけてた。

司会者が笑わせているのがひどくしらじらしいものに感じる。

恐る恐る携帯を開く。

今日撮った写真のフォルダを選択するのに指が震える。

写真を表示する。床。

次の写真を表示させる。

突き当たりにある窓から消えそうな光が廊下をやわらかく照らして。

窓枠の角の下に人型の黒い塊がいる。

ああ。見間違いじゃない。
行かなきゃよかったと本気で後悔。

…待つて。

以前撮った写真を画面に表示する。
画面いっぱい黒幕が広がる。
わかった。これはミスじゃなくって。

近い距離から撮ったから黒しか映ってないんだ。

以前の私は知らず知らずのうちに黒い塊に
自分から近寄って、撮ったんだ。
お祓いの効果があったから黒い塊は遠いんだ・と思う。

とにかく明日、神社に行こう。

part 3 (1072字)

眠ろうと目をつぶると、次に目を開けたら
例の人形が目の前ひとがたにいるような気がして
結局全然眠れなかった。

朝日が入るまでは夜からずっと電気をつけっぱなしにしてた。

これ、更新しようかな。

普段ならすぐに適当な説明を付け加えてブログを更新するけど・・。

更新してから呪われてました、なんて想像したくない。
とにかく早く神社に行こう。

お守りとかお札とかもらえるかもしれない。
近くに落ちていた服に着替え逃げるように玄関のドアを開けて、
鍵を閉めようとドアに向き直る。

ドアノブに黒い手形がついていた。

悲鳴を上げてドアからすぐに遠ざかる。
このマンションはちゃんとしてる物件だし、自殺した人もいない。
ついてきたんだ。憑いてきてるんだ。

車に乗ってエンジンをかけようと車のキーを挿す。
バックミラーが目に入る。

人気を感じさせない後部座席が映ってる。
ひとけ

止めよう。歩いていこう。

乗り込んだ車のドアを閉めるときに何か居た気がする。

イヤ。イヤ。イヤだ。

誰でもいい。

誰でもいいから誰かそばに居て。

マンションから1時間ほどかけて神社に着くと、
石段を掃いている人が一人。あの人だ。
昨日お払いしてくれた人だ。良かった。

「すみません」

ワラにもすがるような声で声をかける。

「あれ。昨日のお嬢さん。」

そう言った後住職はすぐに優しそうな顔をゆがませる。

「あんた．．なにした？」

それからしばらくは泣きながら経過を話した。
とにかく助けてほしい。なんとかしてほしい。

「あんた、今日は家に帰るつもりかい？」

住職は伺うように聞いてくる。

「い、いえ．．まだ何も」

しゃくりあげるのをこらえながら声を紡いでいく。

「だったら、今夜はここにいなさい」

諭すような声で住職は言ってきた。

その声には説得力があるような気がしてその日は神社に泊まることにした。

住職は私のために布団をはじめいろいろなものを部屋に運んでくれた。

そして部屋の四隅にお札を貼った。

そのお札が私に自分の本当にまずい状態であることを訴えてる。

「いいかい。あんたがなにをしたのかは知らんが、あんたは目をつけられてる。」

「…はい。」

「今夜、そいつはあんたを連れて行こうとする。」

「連れていく…?」

「あの世だよ。」

ぴしやりと住職は私に向かって言いはなった。

「この部屋には入れないようにしている。

何があってもお札をはがしたり、招いたりしてはいけないよ。」

「はい…。」

今朝のドアノブの黒い手形が頭をよぎる。

今夜“アレ”が来る。

「早く寝てしまった方がいい。その方が安全に明日になる。」

「明日になれば大丈夫なんですか?」

「わからん。ただ、除霊はする」

昨日はすごく頼りになる気がした住職がそう言ったことに不安になった。

part 4 (934字)

ふすまをしつかりと閉め、障子越しに住職の姿を確認する。

「お願い．．します。」

「あんたも、くれぐれもな」

部屋には時計と布団以外は掛け軸があるだけの殺風景な大広間。
一人でいると部屋の広さがリアルに感じる。

住職もああ言ってくれてるし、早く寝よう。

昨日は寝てなかったのか、少し安心したのか
目をつむるとゆるゆると眠気が襲ってきた。
起きては時間をみて、また少し寝る。

そんなことを繰り返しているうちに午前1時になった。

おおおおおおおい．．．。

障子越しに声が聞こえる。

ふすまに映る人影はどう見ても住職じゃない、大きすぎる。
写真に写ってた黒影は遠くだったから

大きさがわからなかったけれど、

今ふすまの向こうにいる影はゆうに2mはある。

イヤ。イヤ。いやぁッ!!

死にたくない。

暗がりですべてを見渡すと四隅のお札がはがれかけてる。

おーい。おーい。おーい。おーい。

短く声を発するたびにお札がびりりと剥がれていく。
急いで布団から這い出して部屋の角に走る。
貼らないと。

貼り直さないで。

おおーい．．おおーい．．おおおおーい。

声は大きく、短くなっていく。

1つのお札をしっかりと貼り直す。
角に走りすぐに二つ目も貼り直す。

おおおおおい。おおおおおい。

3つ目と4つ目は今にも剥がれて落ちそう。
早く、貼り直さないで。早く。

3つ目の角に走りお札を手で押さえる。
その間にも声は耳元で聞こえるように大きくなっていく。

4つ目！

4つ目の角に貼つてあるお札は障子の近くの柱に貼つてある。
けれど貼れている部分は下の一部分だけで
重みに負けて今にも落ちそう。

おおおい！おおおい！おおおい！！

閉め切った部屋なのにお札がなびいている。

剥がれる！

今にも剥がれそうなお札に走りながら手を伸ばす。
指先が触れるとき、お札は風に吹かれるように剥がれる。
すぐに剥がれたお札を柱に押しつける。

声がやんだ。
間に合った。。

「おい。」

破れた障子の隙間から血走った黒い目が私を見ていた。

最終話（1117字）

障子から入る光で目が覚めた。

布団から抜け出して柱の前で倒れていたみたい。

外は明るくなってるみたい。もう朝になってるのかな。
枕元に置いてある時計に歩み寄る。

「おおーい。大丈夫かい。」

…住職。

「気を失ってましたけど、大丈夫です」

「そうかい。それは良かった。」

「お腹は減ってないかい？朝ご飯を用意しておいたよ」

「あ、いただきますー」

ごはんを聞いて初めて自分がひどくお腹が空いてるのに気付いた。

「ここに置いておくから食べ終わったら運んでおいてくれ。」

「住職、もう出ても大丈夫ですか？」

「ああ、なんとか除霊はしておいたよ」

安心してふすまの取っ手に手をかける。

なによりお腹が減っていた。

この部屋には入れないようにしている何があってもお札をはがしたり、招いたりしてはいけないよ

取っ手を握る手がぴたと止まる。
走って布団の近くに転がる時計をみる。

午前2時。

その時間を見た途端に障子から入っていた光は
みるみる黒ずんでいき夜の色に部屋が染まっていく。

いる。まだ、いる。

「おおーい。ご飯はいいのかい？」

「いりません！」

「おなか減ってるだろう」

「いりません！減ってません！」

「・・・・・・・・。」

バンッ！！！！！！！！

住職がいた場所の障子に大きい手形の影が叩きつけられた。

それから数時間は眠る気になれずに
ふすまを見つめながら数時間を過ごした。

午前6時になるとふすまの向こうから

「大丈夫かい？」と住職の声が聞こえる。

「はい、大丈夫です。少し疲れました．．。」
「入るよ。」

そう言々と住職はふすまを開けて部屋に入ってきた。

「お疲れさん。とにかく“ヤツ”は帰って行ったよ。」
「そうですか．．。」

「疲れただろう。もう帰って大丈夫だよ。」

「ありがとうございます。」

深くお辞儀をして何度も何度も感謝した。

部屋から出るときに四隅のお札が真っ黒になっていることに気付いた。

家に帰ると人神社に行く前には恐怖しかなかったけど、
部屋に入るとすごく安心した。
布団に倒れると起きられなくなるほど重く感じる。
私、すごく疲れてたんだな…。

耳馴染みのある着うたが聞こえる。
電話。

「もしもし．．」

電話で起こされて自分が夕方まで寝てたことに気付く。

「もしもし？サナエ、近くに神社なかったけ？」

「うん。近く．．でもないけど。」

「燃えたって」

「えっ？」

「神社全焼したんだってTVでやってたから大丈夫かなって」

うそ。うそ。うそ。

私が今朝お世話になった場所は

真っ黒になったガレキのさら地になっていた。

救急隊員が真っ黒の炭になった住職だったものを担架で運んでいる。

まるであの影のような姿。

きつと住職は除霊できたんじゃない。

私から狙いを外してくれたんだ。

本当は私がこうなるべきだったんだ。

ガレキの下から声が聞こえた。

おーい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2104s/>

黒幕

2011年10月8日22時03分発行